

実証的研究を通じて見た歴史地理学的地域 とその変貌

——和歌山県海南市旦来部落の場合を通じて——

池 浦 正 春

は し が き

小論では近畿先進地方に普通に見られる過小農農村という環境の下に変貌を遂げてきた和歌山県海草郡亀川村旦来（アッソ）部落（最近合併されて海南市旦来となる）を地域変貌の一類型として歴史地理学的に分析することを通じて歴史地理学における地域とはどんなものか、又その変貌のもつ意義について筆者のささやかな私見を述べることで目的である。旦来部落に主体をおいたが、対比の必要、資料の欠を補う必要から近接の小野田部落に言及する個所もあるが予め御了承を乞う。

一、自然と耕地と戸口

極限された自然的基礎

旦来部落は海南市街地域より四軒、低い丘陵性の古生層山塊を介してその北側に横たわる南北〇・五〜一軒弱、東西四軒余の小谷底平野の中央に立地する。この狭小な谷は亀川の小海湾に堆積した洪積扇状地で被覆される。南北を古生層の丘陵性山塊に限られた自然的条件から三百数十年間わずかに二％弱の増加に過ぎな

第一表 近世における耕地増加

	且 来 村			小 野 田 村		
	石 高	田畑面積	増加指数	石 高	田畑面積	増加指数
慶長6 (1600)	石 1149.46	反 (718.720)	100	石 1053.28	反 658.324	100.0
元禄10 (1697)				1053.96		100.0
文 政 (1819)	1169.76	(733.100)	101.7	1073.51		101.9
明治2 (1819)	1169.76	733.100	101.7			
明治8 (1875)		733.100	101.7			
現在		701.00	99.0			

い固定した生産の場を基盤としてその集落史を展開している。(第一表) 谷奥部に立地する小野田部落に比較すれば且来部落は古来古熊野街道(小栗街道)に沿い城下和歌山により近いという交通地理的条件が集落の性格を根本的に相違させている。

耕地と戸口 戸口動態については且来部落は史料的に文政以前に逆上り得ないので、史料を現存する小野田部落の傾向から類推することとして第二表を作製した。小野田部落では近世前期の緩慢な増加(増加率年当〇、一四%)と、後期の停滞状態が対照をなしている。且来部落の場合もこれと略同様な動態を示したものとすれば、文政期の戸数(統紀伊風土記所載)一五一戸は明治二年の農家数一四五戸(明治二年大差出帳控所載)や壬申戸籍の二二五戸から推して農家数と考えられる。明治五年の壬申戸籍の戸数の内訳は、帰農武士二八戸を考慮外としても雑業者(三三戸)、商人職人(工人)六戸以外などの余業戸数が高率を占め、農家比率は六五%弱に低下する。幕末四十数年間の農家戸数の停滞傾向から仮に徳川時代ほとんど変化ないものと考えても、当初から一戸当平均耕作規模は五反の過少経営となる。従って、当時の生産力の大きさからすれば、増加戸口を農業で収容し得ないのみならず、農業のみの自給度さ

第二表 旦来・小野田村戸数動態

	旦来村		小野田村	
	戸数	指数	戸数	指数
慶長6 (1601)			108	100
元禄10 (1697)			122	113
文政2 (1819)	151	100	127	117
明治2 (1869)	142	94		
〃 5 (1872)	225	159	138	127
昭和34 (1959)	269	178		

え低い。増加戸口は農業外余業への衝動を伴う潜在的過剰人口をなしたわけで、壬申戸籍の如き高率の雑業戸口を生む結果となった。この点、増加戸口の経営の零細化（当初の一戸当平均八・五反から五・〇反まで低下）によって農業に吸収した小野田部落の場合と根本的に相違する。固定した耕地の下では戸口動態のみが社会変質の上に重要な役割を果す。

明治以降産業革命の進展とともに戸口の増加は見られるが、農家戸数はほとんど停滞状態を示している。

二、封建農村の生産

商業的農業を伴わない非自給的農業 年代不詳ではあるが、恐らく徳川末期の農村経済の収支を示した「村中人数飯料見積り掛之帳」によって作製した収支表（第三表）によると、九〇％弱に達する高率の米麦二毛作経営をとるが、五反という過小農経営と農業外余業人口の収容から八二・六％と自給率を引下げている。畑には自給用の醤油と味噌の原料とする若干の大豆作の外、ほとんど自家消費にするわずかな密柑と茶がある位で他に商品作物がない。この部落で行われた搾油、繅糸、製蠟の原料たる菜種・実綿・ハゼも野生のものを採取する以外は栽培されていなかった。絶対量の限られた耕地面積の中では商業的農業さえ極めて貧困であった。こうして過小農家の潜在的過剰人口と農業外過剰人口は「家職小商ひ駄小賃搾等二而取続来申候」（前掲見積り掛之帳）というように労働力商品化の方向を指向する。この過剰人口に農村マニユファクチュアの成立基盤があつ

第三表 旦来村収支表（村中人数飯料見積掛之帳より作製）

収 穫 高

		作付反別	作徳米	反当収穫	作徳米計	支出高計	差引 不足高	不足合計
米 作	本田 新田	反 685.0 15.3	石 1233.0 24.8	石 1.8 1.6	石 1257.48	▲ 石 1476.693	石 213.203	石 398,123
麦 作	本田 新畑	580.0 35.0	696.0 36.0	1.2	732.00	× 906.900	174.920	
大豆作	畑作							

支 出 高

	人口	1人当 日飯料	1日当 合計	1ヶ月 分合計	菜種 引	下肥代	村小 役米	上納 貢種	綿油 原	支出合計
8才以下	113	米 2.5	1.72	110.70	石	石 40.0	54.57	石 714.14	石 40.00	▲ 石 1476.693
8才以上	740	米 2.0 麦 3.0	14.49 23.22	557.20 835.92	30.0					× 906,900

た。

農村マニファクチュアの簇出 マニファクチュア

の初現は史料的に不明であるが、元禄・享保頃（一六八八—一七三六）には既に車屋定右衛門（現、中井定右衛門先祖）によって水車搾油が行われていたし、「延宝九年旦来村総屋嶋屋武大夫株」（横に正徳六年三月古嶋屋庄衛門株と明記）という株監札が現存しているから、その頃から総系のマニユが行われていたかも知れない。何れにしてもかなり早期に属する。然し、本格的には油屋徳左衛門（現、中井徳左衛門の先祖で後に総屋と屋号を改める）と、総屋利兵衛による宝暦以降であると考えられる。史料的に明らかな総屋徳左衛門の場合について見れば、車屋定右衛門の分家として当初の油屋（水車搾油）から程なく総屋を主業とした。原料綿を毛見・紀三井寺・三葛村新田（布引）・三葛・高須・荒川など近在の綿農より買い集め、自家の作業場に雇傭した村内の織子の労力を使って行うマニユであった。その製品は、日方・

第四表 総屋徳左衛門江戸出荷一覧 (塩津港)

	積出 回数	積出高	積込廻船名				江戸取引問屋
弘化1	5	43 ^丸	千寿丸 天地丸	住福丸 天寿丸	天神丸 改勢丸	海福丸 嘉兵衛舟	山形屋三郎左衛門
2	6	66	同	上			村瀬勘兵衛
3	8	116	同	上			辻新兵衛
4	12	124	同	上			升屋久藏
嘉永1	7	75	同	上			糸屋半兵衛
2	10	101	同	上			嶋屋源兵衛
							久野屋善助
							丁字屋清兵衛

(弘化二年総糸仕入帳より作製)

和歌山などの領内都市市場たる織屋・糸屋に出す外、行商人による近在農村市場を対象とした農村マニユファクチュアであった。既に文化頃(二八〇四—一八一七)から領内十軒の「御国産江戸井」上方廻縷り総糸買入仲間株の特許を獲得し、弘化頃(一八四四)の記録によると第四表の如く塩津港から年五回一十二回位の諸国廻船を利用するのみならず、塩津浦廻船問屋十一屋甚四郎の八百石積の廻船に出資(文政十三年)し、その輸送手段まで獲得して江戸積上方積を行ったわけである。中央市場に直結した農村マニユファクチュアにまで成長していた。その蓄積資本は造酒(嘉永五年総屋利兵衛と合辦)・製蠟(明治十五年)を兼営、明治中期の手紡糸衰退後は製蠟を主業として大正初年の廃業までに及んでいる。

以上の外に専右衛門(主業製蠟)、中井長左衛門(製蠟↓造酒)、嘉左衛門・武大夫(総屋)と数指を屈する。彼等は一町数反前後の田畑を所有する上層の手作地主であったことは後述の通りである。

以上の如く商業的農業の貧困と農村マニユファクチュアによる労働市場の成長は、既に自給的な封建農村の性格を失わせていたと見られよう。

三、産業革命後の生産

零細工場の発生と近接都市労働市場の成長

農村マニファクチュアの消滅と農村工業の発生の交替期は一般に明治末年から第一次大戦中にあるが、ここでも大戦中の谷口織布（大正五年）を嚆矢として戦前戦後各々三工場の都合六工場の織布工場の発生を見ている。職工六、六五人の農村小工場が部落内非農業労働力を吸収して成立したことは農村マニユの場合と同様である。然し、その経営者は彼のマニユ経営者ではなく、産業革命初期に土地集積を完成した小地主が、農村マニユの支配下に使用人的地位におかれていた先覚実力者である。部落内の労働市場の成長とともに、海南市街地より四軒、和歌山市より六、八軒の近接距離におかれている且来部落は労働力商品化にまことに優れた条件におかれている。第五表の如く都市的通勤労働者の増加―非農家戸数比（三二・六％）の増大、農家戸数比の相対的低下をもたらしたのみならず、農業生産を著しく変化させている。

零細化―飯米農家化と專業酪農化

戦前の統計を欠いているので現在の統計から傾向を分析することとする。

先ず職業別戸数一覧表（第五表）が示す如く、兼業農家の著しい高率（農家戸数の五〇％強）と農業経営規模の零細性（第六表）が最大の特色をなしている。兼業農家の六四・一％に当る五〇戸が三反以下の極零細農家で、一八％（一四戸）を占める三、五反の小経営農家と合してその八二％強という高率の小兼営農家が特色となっている。これは都市通勤者・職人・日傭などの零細な飯米百姓的兼営農家化を意味する。若干の五、一五反のやや規模の大きい兼業農家は、元来專業農家で長男又は二三男の俸給生活者をもつか、主人が農協役場など村内公衙の役員、または事務職員を兼ねた部落内上層農家である。專業農家は五、一〇反層に過半が集中し、なかならず五、一七反層が四五・四％（三五戸）

第五表 職業別戸数一覧表 昭34現在

種別 \ 垣内名		下垣内	野田	久保田	北山	門田	山出	計
事業農家		4	18	5	13	9	28	77
兼業農家	自家営業	2	1	2				78
	俸給	6	8	1				
	職人	3						
	工員	3	12	6				
	日雇	3						
計		14	21	9	8	10	16	
農業外職業者	自家営業	2	3					86
	商業(行商)	3	3					
	俸給生活	5	11					
	職人	2	3					
	工員	6	5					
	日雇	1	2					
	賃内職	3	6					
計		22	33	15	2	13	1	
戦後移住者		5	18					23
旦来部落総戸数		45	90	29	23	32	45	264

第六表 農業經營規模別階層一覽表 昭34現在

	下垣内	野田	久保田	北山	門田	山出	旦来部落計		内 訳		小野田	岡田
									專業	兼業		
10反~15	2	4				1	戸7	%4.5	戸5	戸2	%3.0	%2.1
7~10	6	7	2		1	6	22	14.4	17	5	16.6	29.3
5~7	3	12	2	9	6	10	42	27.2	35	7	27.0	27.1
3~5	3	7	5	4	2	12	33	21.3	19	14	22.6	20.6
3以下	4	9	5	8	10	15	51	33.0	1	50	30.7	20.6
計	18	39	14	21	19	44	155	100.0	77	78	100.0	100.0

を占め、この部落の標準型をなしている。三―五反の小経営層が專業農家数と大差ない二四・七%（一九戸）というかなり大きい比重を占めるのは、この層がやがて兼業農家に下降せねばならない弱小專業層であることを示している。六―七反という標準型專業農家でも、ほとんどこれという商品作物をもたない米麦二毛作経営で、若干の精農のみが乳牛一、二頭飼育の酪農経営を行う。專業農家の機械化が普及し、技術が上昇しているからこの規模・形態でもかなり生計を維持し得る程度の生産力を保持している。然し、專業農家の多くはやがてその子弟を都市的俸給生活者として出すことを目標としている。従って、酪農化、多角化によって高度の專業化のコースをとる少数の專業農家と、下降して兼業農家を志向するものとに分化する潜在的傾向をもっている。こうして少数の上昇的專業農家を除き大部分の農業経営は旧態依然として米麦二毛作を主体とする単純経営に墮してしまふ。都市的労働の兼営方向を志向するという非農業的要素の成長によって著しく変質している。特に当初より非農家の多い野田・下垣内・久保田の各垣内に著しい。

四、村落社会の階層構成

近世前期の構成 近世初頭の史料を現存しない旦来村について明かに

なし得ないが、慶長検地帳（慶長六年検地）・禄および元禄検地帳（元禄十年検地）をもっている小野田村の場合から類推しよう。

まず、両検地帳から名寄して作製した第七表は何れも、明記された村外地主（慶長では九人、二・三六町、元禄では四四人、一六・八一町）を除く村内地主についてその所有構成を一覧表にしたものである。慶長検地帳は、その後尾に家数一〇八軒御公事屋七七軒とある。住民構成の主部を占めるこの御公事屋とは、封建経済を支えた担税者としての本百姓を指すのであるが、この構成表では恐らく二反以上の所有者七〇人、一―二反階層の若干がそれに属したものである。一―二反階層以下にある過半数の零細所有者について検地帳は何も語っていない。御公事屋層と考えられる二反以上の階層を見れば、五〇％強が二―五反階層に集中し、標準型と考えられる五―一五反層が三九％弱で両者が全体の八九％を占めているという限りでは、一応本百姓体制が確立されていたと考えられる。少数の上層階層（高蔵寺四三・八反、形部二郎三三・四反、孫大夫三六・一反、左衛門三三・三反、五郎左衛門二四・七反）は隸農主的な大手作地主でないかと想像されるが、略規模の等しい者が頗頗して先進的な富の均等性を示し独占的な土地集積者がいない。

元禄検地帳では二反以上の階層数がわずか一三％増加しているが、比率は略停滞していてこの層が御公事屋階層として固定していたことを暗示している。上層の藤兵衛（二三・一反）、文右衛門（二一・三反）、安兵衛（一八・〇反）などは庄屋肝煎に名を列ねた近世本百姓の土地集積によって成長した村方地主であろう。慶長当時の隸農主の大手作地主は急に消滅して、徳川前期に比較的均等な近世本百姓体制が確立されていたものと想像され得る。以上のような小野田村の近世期の構成は、ある程度且来村にも通じるものと仮定して且来村の近世後期の構成を分析しよう。

第七表 小野田・旦来村田畑所有階層別構成

小 野 田 村

	(1601) 慶長 6		(1697) 元禄 10		(1875) 明治 8		(1940~45) 昭和15~20		(1952) 昭和 27	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1反以下	89	49.0	44	30.2	17	14.5	32	24.2	20	15.4
1~5	58	32.0	72	49.5	63	55.8	61	42.6	58	47.5
5~10	20	11.1	22	15.1	27	23.4	30	20.09	30	26.6
10~15	7	3.8	1	0.69	2	1.86	15	10.5	8	6.55
15~20	2	1.1	3	2.06	7	6.03	4	2.8	5	4.1
25~25	1	0.6	2	1.38			0		1	0.82
25~30			1	0.69			1	0.7		
30~40	3	1.65								
40~50	1	0.6								

旦 来 村

	(1819) 文政 2		(1867) 慶応 3		(1940~45) 昭和15~20		(1952) 昭和 27	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
(1石以下)	9	10.8	11	11.8	59	31.0	73	31.7
1反以下								
(1~7)	49	56.5	53	57.0	87	46.9	107	42.1
1~5								
(7~15)	28	33.8	28	30.0	25	13.1	39	17.0
5~10								
(15~23)	4	4.7	1	1.07	6	3.2	7	3.0
10~15								
15~20					6	3.2	2	0.8
20~25					2	1.06		
25~30					2	1.06	1	0.4
30~40					1	0.5		
40~50								
50~90					1	0.5	1	0.4
90~100					1	0.5		

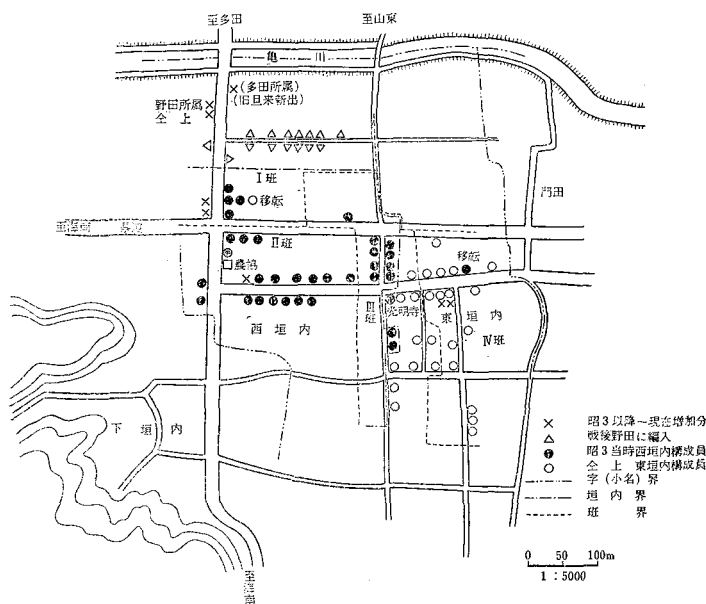
近世後期且来村の構成 且来下村（久保田・門田・北山・山出の四垣内をいう）のみの資料であるが、文政二年

（一八一九）と慶応三年（一八六七）の高名寄帳により作製した階級構成表（第七表）を見れば次の如くなる。全体として大土地集積者はなく、最高二十石余（一五反余）で、五〇反に相当する七一一五石階層に三二%弱集中して、小所有ではあるが平均化された先進地域の構成を示している。これは小野田村の近世前期で見たような近世百姓の分解が早く行われた結果であろう。明治二年の大差し帳控は、且来村の住民構成を上下両村庄屋肝煎四軒と本棟（五四軒四〇%弱）・中役（三八軒二八%弱）・下役（四四軒三二%強）の三身分階層に分かれた一三六戸の百姓とから構成されていたことを伝えている。三身分階層は担税力の大小、つまり富の階層を示すわけであるが、本棟中役などの上層が大きい比重を占めるのも上述した如き富の平均化を裏書している。近世後期の搾油・繅糸・製蠟・造酒のマニユファクチュアも村役人をする程の一〇―二〇石層の上層手作地主（定右衛門・徳左衛門・利兵衛・専右衛門・嘉左衛門など）の経営にかかる。然もその蓄積資本が土地集積に向っていないところに小農民の独立自作化の早かった先進地域農村の性格がうかがい得られる。

産業革命後の構成 戦前の所有構成を示した第七表によると、一町―数町までの中小地主が多数顔顔して独占の大土地集積者がいない。これらの中小地主は、上述のマニユ経営者と第一次大戦頃の産業革命初期の農村小企業経営者が勤勉によって築いた小自作農がふくまれる。地租改正直後の寄生地主生成期にも、初期革命期にも大寄生地主化を許さず高々数町までの寄生化に留まるか、多少の小作地をもつ手作地主におわり、富の平均化という先進的性格をとっている。

垣内構成 旦来、小野田両集落は既に近藤忠氏によ

って報告された、いわゆる小名集落の典型である。旦来村について見れば、その垣内構成は下垣内・野田・門田・久保田（窪田）・北山・山出・矢口（字名に矢口がなく古来山出垣内の一部にふくまれていた）の字に分散された小名、すなわち垣内からなる。各小名の成立については当集落においても実証し得ないが、自然村である六つの垣内が集って荘名旦来（「続日本紀和銅元年七月紀伊国名草郡旦来郷壬：歳戸籍」とあるを初出とし、和名抄郷名にもある）を称する大名、すなわち行政村を構成する。各々の小名集落は垣内が基礎的なコミュニティを形成し、複合集落としての旦来村は二次的な共同体をなしている。更に徳川時代はこの大名が上村、下村の二行政体にわけられた。すなわち北山・山出・久保田・門田の高四七五石五升四合が前者に、下垣内・野田の高六七四石九斗四升八合が後者に所属し、各々



に庄屋、肝煎、頭百姓の三役をもつ行政村となっていたが徴税・水利・訴訟・村明細帳（大差出し帳）の記載など、村の重要事務の全部は旦来村として統一に行っているから、貢租徴収などの事務的便宜上分割したもので独立村としての人格的統一性をもっていなかったものと考えられる。ここに当面の問題としているのは、かような第二次的共同体ではなく小名垣内で、その規模は野田の九〇戸を最大とし、当地方中位の大字に相当する二〇〇〜五〇戸である。この小名が第一義的単位集団であるが、この単位地域集団が更に幾つかの出垣内にかれる。野田垣内では東・西垣内の二つに、下垣内の場合には奥出・店出の二つになっている。第二図この垣内は統一的なコミュニティとしての小名垣内の内部で、本来交際の地域的範囲として自然発生的に形成されて来たもので、今も多くの交際はこ

の垣内交際が主体となっている。小名垣内を基盤とする共同体的社会生活たる宮座・宮講(野田)・地藏講・伊勢講・大峯講などは、少くとも中世末以来数百年間実際にはこの垣内内の出垣内を単位にして行われていた。後述するように少くとも近世徳川時代において多分に血縁的要素が崩れつつあり、地縁的性格が強くなって来ていたと考えられるこの垣内が、かような地縁的交際範囲の細胞单元に分れるのも当然であろう。先ず共同体的構造の基礎单元たる垣内の社会生活の分析から始めよう。

宮座 若干の史料を現存している下垣内について見よう。徳川時代の宮座は上下両村単位の構成になっていたが、今、且来下村の場合の構成を見ると、最初は八人の伴頭株を最高の上座とし、会計役を司どる十人の中言株(中間株)と三〇人の平座株からなる四十八株をもって氏神八幡宮の座株を構成していた。何れの宮座にもあるように惣領男子継を原則とし、惣領男子の実子なき際には「血縁占養子仕又右血縁筋ノ男子無御座候節ハ伴頭ハ伴頭之内占養子仕出座相続仕候又伴頭中間内二可取女伴無御座候時ハ中言平座之内占養子仕候ハ実家之名跡ならてハ相成下申義往古占之仕来ニ而云々」というように極めて血縁的性格と身分的性格の強いものであって、寛延二年(一七四九)の出座にも庄屋辻三郎の一統と考えられる庄三郎・武大夫・善兵衛・善四郎・次郎右衛門・利兵衛・善三郎の名が中間株座として見えている。処が、それと同時代である宝暦九年(一七五九)の調べでは伴頭株三人・中言株五人・平座八人に減じていることを伝えている。何れも「世渡として他所へ引越或は死絶ニ而相分り不申」と社会経済的進化による事情を示している。当初の三分の一に減じ果して血縁的村落社会の支配体制が可能であったろうかということ、および後述する如き階級構成の平等性などから考え合せ、既に当時垣内社会の血縁的性格が著しく後退していた事を充分想像せしめてくれる。かような事情を裏書きするものとして明治初年宮座は消滅し部落内分家の交際が垣内交際より

後退していた。

宮講と垣内規約

宮講というのは、氏神八幡宮の宮謝祭（毎年四月十五日）の祭祀を中心とした講組結合で、その起源は不明であるが、彼の特権的な血縁的身分的宮座に代るものとして江戸末期か明治初年頃に発足したもので、既に明治二十年頃盛大に行われていたという。その構成は貧困、後家などの理由で加入しないものを除き、東西垣内とも原則として各々垣内構成員、すなわち宮構成員である。昭和三年（一九二八）当時残存した慣行によれば、若干の拠金と養子入・嫁入・男女出産時の出金とを財源として宮謝祭の祭祀と当日の講員親睦会（いわゆる宮講）を行い、同時にこの拠金を基礎として頼母子の如き融資を行う。つまり、親睦と金融機能をもつ垣内結合であるが同時に垣内規約結成の場でもあった。すなわち、宮講祭の祭祀や親睦の御神酒会は単なるレクリエーションであり、実は垣内規約の改正、実施方策反省について議することが最も重要な行事であった。つまり、宮講の実体は精神的経済的に結合した垣内コミュニティそのものであり、ここに交際範囲としての垣内の共同体的性格の根源が発生したものと考えられる。昭和三年及び八年（一九三三）当時の東垣内改正垣内規約によれば、男女出産時、婚礼披露、家屋新築、上棟、入宮など祝い事の諸つき合、死亡、葬式の際の方式、手伝い、供物ならびに一般仏事に関する諸つき合、日待ちなど部落会合の諸制限等々多岐にわたる垣内つき合の諸規定が成文化されている。伝統的に自然発生した交際の積み重ねが成文化することによって垣内構成員を規制し、垣内そのものを共同体化せしめる。その成文化の場が宮講であるから、宮講のよってたつ基盤たる垣内内の出垣内こそコミュニティの結合紐帯の基礎をなしている。かような垣内規約は今日知り得る古老の記憶でも既に明治二十年頃（一八八六）に逆上り得るし、当時から垣内内親類のつき合いとか、向う三軒両隣式小範囲の特殊な交際や「結い」はともかくとして、小範囲の地域交際や血縁交際がかなり早

くから後退し、垣内範圍の規制が前面に抽し出されている。宮講の運営が全構成員の一年転番の年行司が施主となり垣内総代Ⅱ区長と協力して諸行事一済と会計を行うことの一事を見ても垣内そのものの平等的な地縁性をうかがうことができる。戦後の変質はこの宮講の方式の簡素化と市中銀行の發達に伴う金融機能の消失により、その共同体的性格を弱化させてはいるが、親睦機關として存続して伊勢講、大峯講などとともに垣内コミュニティの何等かの紐帯をなしている。

行政体としての且来 野田垣内で見たとように、垣内内には各個の独立した紐帯を以て結合しながら垣内全体が一つのコミュニティを形成し、六つの垣内が一つの氏神八幡宮に帰一する処に且来そのものの行政体として共同体的結合が保持されたもので、徳川時代の六ヶ寺（明治以後四ヶ寺）はコミュニティの結合には左程役立っていない。

徳川時代は既述の如く上・下両村に編成されたが上述した地縁性・精神共同体的性格が六個の小名垣内をまとまりある行政体に結合せしめている。上村では七藏・定右衛門（車屋、現在の中井定右衛門家）・徳左衛門（総屋、現在の中井徳左衛門家）、下村では庄三郎（現在の辻克己家）・文助・嘉左衛門など上層百姓の間で庄屋役を交互に努めていて特定の家格に固定しないのもこの村の経済力の均等性を反映すると同時に垣内の地縁的性格を決定する要素である。上下両村の分立も且来村の共同体的性格をゆるめていない。明治の町村制施行後の且来は正・副区長の下に六垣内から各々選出した一五人の代表（戦前は総代、現在は区会議員といい野田四人、その他の垣内各二人）によって構成された区会議によって行政が行われる。総代（区会議員）は戦前までは特定の家格に固定しないが、年長者で学識経験豊かな人が特定層から推薦によって固定する傾向が強く、現在では垣内寄合による利益代表的選出方法がとられている。区長も同様で各垣内常会（寄合）で意見調整の上選挙するわけで、ここでは吏務に通達することが必須条件、

である。区会議の最大機能は区費（部落内の土木協議費と耕作反別賦課金）の賦課徴収と、その基礎となるべき等級階級の決定であるが、区会議員は所属垣内構成員と区会議との中間調節機能を果たすことによって行政体としての且来部落の共同体的結合が保持されている。かような複合的な共同体が氏神という精神的な紐帯と次に述べる生産の場における水利の共同性によって強く支えられている。

水利の共同性 大明神池・小野坂池によつたであろう徳川時代当初の状態は不明であるが、宝永七年（一七一〇）の亀池の築造は画期的で、且来部落もまた当時から水下拾壺ヶ井組（明治以後拾壺ヶ普通水利組合）の水懸に属し、その番水系統の一部を構成する。六月十五日から毛付まで第一回の番水は八人の水利委員によつて各部落に割当られるが且来部落に割当られる日数の配分（廻水）は区長の招集する区会議員と水利委員の協議によつて定められる。植付後の第二回配水を終えると通常亀池の貯水は枯渇するのであるが、渇水年ではそれさえ困難であるからその配水は更にきびしく統制される。配水は水利委員と水先（二人の水利と二人の臨時人夫で構成する）とによるが区長が区会議員の協議に基いて水利委員とともにこれを連日現場で監督する。つまり、生産の場における水の統制にも垣内の行政機構が強く関連していることは、社会生活のそれとともに共同体の伝統性を保持する要素となっている。

六、伝統性と変貌

以上数節にわたつてこの村の近世以降の変貌を分析して来た。小農民の分解が早く農村マニファクチュアの著しい発達と労働力商品化の増進により内部的には変容の著しい先進性を示したこの村が伝統を固執しようとする意外に強い要素をもっている。この要素こそ垣内共同体の構造に求められる。垣内社会生活や生産の場における水利の共同性に基く本質的な共同体的性格が昭和年代に入るまで強く残っていたことが明かとなった。かような伝統的性格と同

時に時代変化に適應して諸相をあらわしながら、かような共同体的構造を内面から切り崩して変質させて行く諸要素の萌芽の發達をも分析した。戦前まではおおむね共同体的枠の中における変化であつたと考えられる。近年のアーバンゼーションがこの枠を如何に切崩すかについては紙中の關係で充分分析し切れなかつた。後日稿をあらためて出す予定である詳しい報告によつていただき度い。

最後に小論は筆者の次に述べる歴史地理学的地域の見解を實際にあてはめて見ようとして執筆したのであるが、資料の不充分に加うるに浅学非才ことに見られる如き貧弱なものとなつた。先学のきびしい御批判を希う次第である。なお資料は、且来部落中井徳左衛門・辻克己、小野田部落の山県一郎各氏所蔵の史料、旧亀川村役場（亀川出張所）農協・且来区々長山本喜代一氏所蔵の各種資料をはじめ、現地で調査に御協力いただいた多くの人々の聴取り資料によつた。銘記して謝意を表する次第である。

歴史地理学的地域とその変貌

最後にこの節では一つの生活体としての集落の場の変貌乃至変質の一類型を分析する上に筆者の脳裡を去來した歴史地理学的地域と変貌について筆者なりの見解を紙の数の許す範圍で述べることとする。

産業革命以後の短い近代の歴史に比べれば、われわれ人類ははるかに長い農業時代の歴史をもっている。農業時代のわれわれの地理的生活は、農業という基本的生産形態により運命づけられた自然集落と、それととりまく生産の場たる耕地により構成された生活体として自己完結性をもつた地域空間の中で行われて來た。つまり、農業時代の地域区間はかような自然集落を基本的単位として構成されたわけであるが、かような自然集落の場で自然条件の優越下に

成立していた先史農業集落から、郷庄・郡・地方領国というような高次元的拡大性をもった行政体とか、経済圏とかいう地方圏の構成分子としてその内部に場を占めた近世封建農村集落にいたる間に幾段階かの発展段階がある。この段階に対応する空間的な拡がりは大小の差こそあれ、自然集落を基礎細胞とした発展で、究極のところ近世封建集落たる村Ⅱ大字に集積される。われわれが、ここに変貌乃至変質を問題とする限りかかる自給完結性を持ち、先史・古代・中世の歴史的集積たる近世封建集落を起点とせねばならない、歴史地理学が先史・古代・中世の集落景観の復原を問題とするのは、かような近世封建農耕集落に集積された過去の諸要素の分析の必要からであると解すべきであろう。つまり、歴史地理学的地域として第一義の対象とせねばならないのは、かような先史・古代・中世の集積たる封建農耕集落を分子として構成された地域である。これは同時に封建都市としての城下町、宿場町にも通ずるであろう。

では、かような封建地域は如何なる構造と性格をもつものであろうか。封建農耕段階の地域では、郷または庄の拡がりやを第一次地域とし、さらに地方圏（郡である場合もあり、また数郡にわたる場合も、経済的流通圏とか政治的領域とかである場合もある）という第二次の地域に拡がり、少くとも最後に領国という第三次の地域の中に包摂される。かような高次元的に拡大性をもった地域の中に封建農耕集落が場を占めるわけで、これらの地域は自然的な農耕集落を基礎単位とした共同体的地域である。従って地域の性格構造などの問題は、基本的には一つ一つの自然的農耕集落たる村Ⅱ大字の問題に集約される。つまり、地域像は集落像として自然村に投影される。

処で、理論的には封鎖的な共同体的性格をもつべき封建集落は、実際的には日本の近世封建農村の実態に見られるようにかなり強い異質的な流通要素が内包されている。すなわち、先進後進の程度の差こそあれ異質的な非封鎖的な要素がやがて地域の変質を促す要素となる。歴史地理学の第一義の対象としている地域はかような実態をもった

地域であると考えられる。次に歴史地理学が單なる過去のある時の断面たる地域景觀の複原のみで事足りりとするのではなく、それを基点として現在の地域を分析する処にあることは既に定説化している。従つて復原と同時に變質乃至變貌過程の分析こそ歴史地理学の他の重要部面である。ここに變質乃至變貌というのは、既述の如き農耕集落内における先史・古代・中世というような發展ではなく、農耕集落に全く異質的な近代という商品流通的な非自給的要素によつてあらわれた地域の變質あるいは變貌と解すべきである。従つて、その本質的なものは産業革命の發展過程に見得られる。――勿論かような變貌は原初的な形としては封建地域の解体過程に見得られるが、――

処で、かような變質は、その地域の封建的構成要素の量的減少と近代的要素の増大によつてなされるが、元來この二つの要素は、それ自体自己完結的なものであるから非連続的なものである。歴史地理的地域はかような異質的要素によるモザイク的構造をもつていたものと考えられる。その量的比重の程度に応じ先進・中進・後進など幾段階かの地域性があらわれる。それは勿論普遍的な發展系列の段階ではあるが、個々の地域については各々個々の尺度により設定されるのが眞の態である。